

ウィリアムモリスと「東方問題」

宮 井 敏

トマス・モアの伝記をくわしく調べると、その生涯の事蹟の一つ一つがいかに「ユートピア」執筆のためには不可欠のものであったかがわる。もともとユートピアンには最少限度の社会科学の知識が必要だとされているが、若くして法律家の訓練をうけ、ロンドン市助役となり、下院議長となり、すすんで財務次官、通商使節となり、ついには王の大法官となった、もとは文学者のモアが、当時のイギリス人の中では理論と実際の両面から、法律、政治、経済に最も精通していた事が彼をして不滅のユートピアンたらしめたものといえよう。同時にまた Karl Kautsky も指摘するごとく¹、ヒューマニストであった彼の個人的性格、哲学者、古典文学者として思想的訓練、各種の社会的活動などに加えて、当時のイギリスが置かれていた経済情勢が彼を時代に先んじた Communist として育て上げたわけである。

同じことがユートピアン、ウィリアム・モリスについてもいいうる。つまり、元来は“Earthly Paradise”の如き幻想の詩を本領とするモリスが、工芸家としての実践活動を通じて次第に社会的関心をつよめ、ついには socialist utopian として *News from Nowhere*² を残すに到ったというのも、彼の romantist としての個人的性格、各種の思想的訓練、さまざまな実践活動が十九世紀半ばの特殊イギリス的状况と相まって見事に結実したものに外ならない。時代こそ違え、イギリスの生んだ二人のすぐれたユートピアンが三世を隔てて相似た激動の社会情勢の中へ書齋を飛び出してコミットして行った事が彼等の社会主義思想を育て、総合的な問題提記としてのユートピアを生んだものと云えるであろう。

ところでそうした socialist Morris にとって生涯で決定的に重要な転機となったものは 1876 年のいわゆる「東方問題」であろうと思われる。時にモリス、四二才。建築家たらんと志して G. E. Street の事務所に入門した二二才の時から Hammersmith の Kelmscott House で没する六二才までの生涯の丁度折返し地点にあたる。同時にこの年は室内装飾専門の Morris, Marshall, Faulkner & Co. を解散して、単独責任の Morris & Co. を設立した翌年で、工芸家としていよいよ円熟の境地に入らんとする頃合であり、また詩人としてもようやく D. G. Rossetti の影響から脱して、北欧志向を強め、はっきりと独自性を打出して行く時期に当たっている。そして、この時点を境として、いよいよ、socialist, utopian, 講演家、美術評論家としての幅広い活動がはじまる生涯の後半部分に入ってゆくわけである。

この頃までのモリスは実は少数の気の合ったグループとの接触は別として、必ずしも社会的であるとは云いがたいタイプの人間であった。1874年3月26日付の Baldwin 夫人に宛てた手紙の末尾に、“... Sad grumbling—do you know, I have got to go to a wedding next Tuesday: and it emerges me to think that I lack courage to say, I don't care for either of you, and you neither of you care for me, and I won't waste a day of my precious life in grinning a company grin at you two...”³とあり、ふつうの世間的な交際が彼にとっては少なからず苦痛であったらしい事が示されている。Mackail は云う。「自分でも殆ど気付かぬままに彼は社会活動と政治生活を今はじめようとしていた。その二つともから、彼が属していた芸術家サークルの人々と同様、それまでは全く関心のない事柄とせずずっと遠ざかっていたのである。」⁴ また Bruce Glasier も “He lived, even as he worked, in his own way, heeding very little the conventionalities of his class or profession.” とのべ、のちに *A Dream of John Ball* のなかで、あれ程までに “fellowship” を唱道した人物としてはその非社交性は些か奇異な感じさえすると語っている⁵。本人もその点について

は、“I who am writing this am one of a large class of men—quiet men, who usually go about their own business, heeding public matters less than they ought...”⁹と云って率直に認めている。そうしたモリスが人前で演説をしたり、政治集会で即席のアジ演説をしたり (“... I even tried to flit a few words at a small meeting we had at Lambeth yesterday...”)⁷、街頭デモをすることなど工房と書斎の間を往復していた頃の彼にはそれこそ考えも出来ない事であったであろう。 (“... afraid to speak in such a huge concourse as English nation...”)⁸それがまことに思いもよらぬ事から突如として、執行委、抗議集会、連絡会議、オルグ活動、陳情、投書、デモ、アジの生活が始まることになったのである。時あたかもイギリスではチャーティズムの思い出がようやく過去のものになるうとしていた矢先、70年代の半ばに到って、アイルランド問題、初期帝国主義の問題、大不況から生ずる農業問題などが次々と発生し、加えて William Wilberforce が英領植民地における奴隷制度廃止問題で先鞭をつけたさまざまな大衆運動が広範囲なひろがりを見せ、労働組合組織は又社会主義運動と再び提携して波動的な大不況に対処しようという、まさに書齋人の社会参加としては最も激しい、だが絶好のタイミングを提供していたのであった。

ところで「東方問題」と云うのは、ふつうには十九世紀の露土戦争 Russo-Turkish Wars をめぐる対近東政策についてのイギリス国内での議論を指すが、同時に又、時の宰相 Benjamin Disraeli がとった世に云う帝国主義政策に対するはげしい賛否の議論をまき起したきっかけとしても記憶さるべき十九世紀イギリス史上の重要な事件となっている。露土戦争と呼ばれるものは元来、古く1453年、オスマン・トルコがコンスタンティノープルを占領してビザンティン帝国をほろぼした時からそもそも始まっている。1472年にはモスクワ大公国のイワン三世が東ローマ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス十三世の姪、ゾエ・パレオロゴスをめとって、みずから東ローマ帝国の後継者をもって任じ、モスクワを第三のローマと称し、実質的にもビザンティン

帝国の復活をねがってトルコと激しく対立した事が遠因となっている。その意味では十五世紀以来の一連の露土戦争というものは、単に南に不凍港を求める北方民族の伝統的な南進政策の結果であるに止まらず、いみじくも Arnold Toynbee が指摘するように⁶、ロシア民族発展の基本的エネルギーのあらわれであるという側面をもっている。その事が、低い経済成長と工業化政策の立ち遅れから来る国内の不満のうっ積を領土拡張政策によって対外的にそらそうというニコライ（一、二世）やアレクサンドル（二、三世）など帝政ロシア末期のツァー達の汎スラブ主義と結びつき、又ロシア正教を中核とする東方正統教会の正統意識よりする異教徒回教国制圧の使命感と相まって長く中近東の緊張をもたらしていたものである。

こうした歴史的経過の中で普通に「露土戦争」というのは1877年から1878年にかけての、その最後のものをさすが、長年にわたる国際紛争がいよいよ大詰めをむかえ、ヨーロッパにおけるトルコの国際的地位の相対的低下に伴って、バルカン地方の諸民族のナショナリズムと、これを利用しつつロシアの汎スラブ主義を牽制しようとするヨーロッパ列強の複雑な思惑がからんで、最初からきわめて屈折した展開を示していたものである。1875年7月、ボスニア、ヘルゼゴビナに反乱がおこり、翌年にかけてブルガリアでキリスト教徒と回教徒の間に虐殺事件が頻発し、これを契機としてヨーロッパ・トルコの中で事実上独立国を形成していたセルビアとモンテネグロがトルコに対して公然と開戦、一方、ロシアはトルコ領内のキリスト教徒保護を口実としてトルコへまさに侵入しようとしていた。イギリスは中近東の平和と地中海東部における足場の確保のために、ロシアの開戦を阻止しトルコの応戦を押えるべく、トルコ国内の近代化政策促進を条件としてその領土保全をつよく主張していた。また国内ではこのころ Little Englandism を唱えて、諸経費、駐留費節減のためからも世界各地の英領植民地の分離を主張していた自由党のグラッドストーンに対して、保守党のディスレリは逆に「帝国の統合」をかかげて、自治植民地の結束をはかり、とりわけ南北戦争終結後

のアメリカ合衆国の隆盛を見た喪失感の裏返しとしてのインドに対する強い執着が、印度を帝国としてヴィクトリア女王に *Empress of India* の王冠を捧げ、英印両帝国をむすぶいわゆる *Empire Route* の確保のために全力を上げていたのである。

この一連の動きの中で、とりわけイギリスの一般大衆を刺激したものは“*Bulgarian Atrocities*”として知られるトルコの不正規軍 *Bashi-Bazouk* による1876年4月以降のブルガリア住民の大量虐殺事件であった。連日の自由党系新聞 *Daily News* による報道は滔々たる当時の *humanitarianism* の風潮もあって国民一般の憤激を買い、度々の政府首脳の否定的な談話にもかかわらず、8月出先外交官によってその真実が確認されるや、各地で次々と土耳其政府非難の抗議集会が開かれ、国内の反土感情は日に日に高まって行ったのである。9月6日には野党の領袖、前首相グラッドストンの *The Bulgarian Horror and the Question of the East* と題する政治パンフレットが出され、ほんの数日で4万部を、この月中で20万部を売りつくすという異常なまでの反響を呼んだのであった。彼はこの小論の中でトルコの暴政を非難し、キリスト教徒の犠牲者に涙し、年来の主張である「ヨーロッパ協調精神」(*European Concert*) を強調し、与党の党首ディスレリ首相を弾劾したのである。

こえて10月24日、*Daily News* は突如“*The Author of Earthly Paradise*”と自ら肩書をつけたウィリアム・モリスの長文の投書¹⁰を掲載した。この中で彼は少数民族の独立を阻んでいるトルコ政府の前近代性を批難し、とりわけ独立運動に対するその仮借なき弾圧と虐殺を攻撃し、一連の事実にご意に目をつぶっているディスレリ首相、ダービー外相、下院保守党の怠慢と好戦ムードをなじり、前週日曜日のクラーケンウェルでの二千人の労働者による反戦集会の意義を強調し、グラッドストンと自由党に支持と激励を与え、女王陛下の野党としての責任をあくまでも果たすように要求したものであった。

これより先、グラッドストン執筆のパンフレット発行直後に Sheffield 選出の自由党左派の代議士 A. J. Mundella は、かねてより自由党と労働者組織の緊密な結び付きを目論んでいた党内急進派の立場を代表して同郷の Robert Leader とはかり、国民的規模の時局政治集会を計画していた¹¹。彼のこの提案は、自由党を通じて労働者の諸要求を議会に反映させようとする労働組合側の方向と、労働者組織を自由党の下部機構として党勢の拡張に役立てようとする政党側の立場の接点に立つものであり、しかも政治家や下院議員は後ろへ引いて、市民、労働者、知識人を前面に押し出すという、ウィルバフォースの大衆運動の方式を更に強化した形のものであった。その点では Whig 系貴族の自由党々首、Lord Hartington はもとより、グラッドストンにもいささかのためらいがあったと云われている。

これとは別個に労働者側の主体的動きとしては Labour Representative League が政党の党利党略にはよらない、純粹に市民・労働者の立場からする少数民族の独立支援と列強の大国主義攻撃をかけた数度の抗議集会をもち、この問題に取り組むプロジェクト・チームを組み、声明を発表し、さかんに市民にアピールしていた。モリスの *Daily News* への投稿は、以上のべた国内の一連の抗議行動が、9月のグラッドストン・パンフによってピークに達し、10月に入って対抗的な反動勢力の動きもあって、いささか下降気味のところへ発表されたために、筆者がおそらく予期した以上の効果を上げることになったのである。

G. M. トレヴェリアンは云う。「ウィルバフォースと奴隷反対論者はイギリスの生活と政治に与論をかき立て民衆を教育する新しい方式をみ出した。事実や論点を情宣すること、相手の曲説に反論すること、パンフレット配布、カンパ、集会等々、これら一切の宣伝方法は今では全く見馴れたものであるが、当時はまだごく目新しいやり方であった…こうしたやり方はのちに無数の連盟や協会——政治的、宗教的、慈善、文化関係——によって模倣され、爾来イギリスの社会生活の大動脈となったのである」¹²。この場合

の奴隷制廃止問題は比較的長期にわたる運動目標であり、一部の保守層をのぞいて国民の全階層・宗派にまたがる、人道主義に支えられた大衆運動であったが、半世紀を隔てた「東方問題」論義はそれよりもさらに急を要する topical な問題であり、また国論を真二つに二分した点においても、前者の場合の運動形態をさらにより整備し緊縮する必要があったわけである。そして逆に、そうしてより前進したキャンペーン態勢が、さらにこの問題についての与論をつよくまき起こして行ったのである。その点、同じトレヴェリアンが別の歴史書で、「この問題〔東方問題〕は、もし天才的な二人の政治家〔ディスレリとグラッドストーン〕がいなかったら、遠いはての鳳と鳥の戦いであり、イギリス人の日常とは何の関係もないものと思われたであろう」¹³とのべているのは、些か偏よった見方であり、奴隷廃止運動に始まった大衆運動が十九世紀を通じて発展して来た事実を歪少化するものと云わざるを得ない。「東方問題」は先進国では外交問題ですらはっきりしたナショナル・コンセンサスが得られなければもはや一個のポリシーたり得なくなっているという事をいみじくも示しているのである。要するに Eastern Question はモリスにとって、その発生のタイミングにおいてそうであったのと同じように、事の性質の上から、展開の形態の上から、絶好の政治ゼミナールであったと云う事になる。

もとより、上記のモリス書簡には、問題の整理に若干の混乱が見られ、また事態の分析にも多少の素人臭さがあるのは否定出来ない。たとえば称するところの社会主義、欧州強調はさておき、自由党内における、又議会内部における失地回復のチャンスを狙うグラッドストーンのはなはだ屈折した意図に対するまことに無邪気な信頼の仕方や、事態の激変に敏速に対応し乍ら複雑に展開して行くディスレリの政策の究極的な意図をつかみそこねている点、および、ロシアの伝統的な外交政策の基調に対する無知などが上げられよう。 (“I know that the Russians have committed many crimes, but I cannot accuse them of behaving ill in this Turkish business at present, and I

must say I think it very unfair of us, who freed our black men, to give them no credit for freeing their serfs . . .”)¹⁴ また、一般的に云って、ほとんど力学的に展開する政治の世界のメカニズムにまったく通じていなかったこと、すべての政治家に共通する建前と本音のちがいに気づいていなかったことなども考えられる。けれども、もともと社会参加の経験の皆無であったロマン派の詩人の最初の政治的発言としては、立派なものであり、労働者組織の力と倫理感に絶対の信頼を置いていたこと、保守党政府の帝国主義政策にひそむ矛盾を直感的につかんでいたことは、今はじまろうとしている社会主義者としての彼の華々しい活躍をさきがけるものとして、まことに意義深いものがあると云えよう。

ところで、この「東方問題」のなりゆきに関心をよせていたのは何もモリスだけではない¹⁵。前記マンデラのいわゆる“literati”の中には、当時大流行した「言語道断のトルコ」(the unspeakable Turk) という言葉をつくり出した Thomas Carlyle や、モリスの親友 Burne-Jones のさそいに答えて激励の返事をよこした John Ruskin のほか、Robert Browning, Anthony Trollope, D. G. Rossetti などがあり、前記マンデラ宛のモリスの手紙¹⁶にも志を同じくする芸術家、大学講師、編集者、出版業者などの名前が推薦されている。第二次大戦直前にスペイン人民戦線政府に対して、軍部・保守層を背景とするフランコ側が権力奪取を企てたいいわゆるスペイン市民戦争は自由主義陣営と枢軸側の代理戦争として全ヨーロッパの注目をあつめ、英、米、独、仏の知識人のコミットメントに対する一種リトマス試験紙の役目を果たしたが、「東方問題」は半世紀先立ってこれを先取りする形でイギリス知識人に対して反体制運動に対する態度決定をせまる一つのチャンスとなっていたわけである。

さて、全国にみなぎる膨拜たる反戦の叫びに対して保守党々首ディスレリ首相は恒例のロンドン市長招待の晩餐会の席上、激烈なスピーチを行ない、「イギリスという国は一たび遠征を決意する時には、二度、三度の遠征費用

を心配しなければならぬような国ではない¹⁷と大見得を切り、さかんに好戦ムードをあふたが、これが主戦派の人々の人気に投じて一つの流行歌を生むに到った。

“ We don't want to fight, but by jingo if we do,
We've got the ships, we've got the men,
we've got the money too!”¹⁸

もともとは奇術師の“Hey (or, High) Jingo!”という掛声から出たこの言葉がロンドンのあちこちの寄席で大はやりとなったこの *tyrtaean song* に用いられたことから、はじめは「Beaconsfield 伯の近東政策支持者」を意味する“jingoist”という言葉を生み、ついで今日普通に使われている「対外政策に対する示威的強硬論者」、又は「盲目的愛国者」を示すに到ったものである。

面白いことに、これに対抗するかのよう、年をこえた1878年1月16日、「東方問題」を主要議題とする議会開会前夜の *Exeter Hall* における労働者団体の抗議集会でモリスの作詞にかかる、おそらく世界最初の *demonstrating song* が歌われたことである。“Wake, London Lads, wake, bold and free! Arise and fall to work, Lest England's glory come to be Bond servant to the Turk!”¹⁹にはじまる五節から成るこの歌は、当夜の主催者の一人である前記 L.R.L. の書記長、下院議員 *Henry Broadhurst* の友人の石工で、ロンドンのとある教会のオルガニストでもある男が仲間の聖歌隊をつれて参加していて、“*The Hardy Norseman's Home of Yore*”という古い民謡のメロディで歌われたという事であるが、十九世紀イギリスにおける「東方問題」論議が、好戦的な軍国歌謡と、正反対の反戦歌と両方を奇しくも同時に生み出したことになるわけである。

ところで、こうしたディスレリの主戦論に一そう刺激されたりベラリストの側では、マンデラの提案通り、労働者、市民、知識人を包括する反戦市民

連合としての Eastern Question Association が成立し、モリスはマンデラを議長とする執行委の財務担当として加わることになった。近東では欧州六ヶ国によるコンスタンティノープル会談が開催されて、トルコの内政改革決議案が議決され、イギリス国内での「東方問題」論議も一時凍結されたが、こえて1877年4月に到って突如ロシアがトルコに対して宣戦布告をした事から動きは再燃、自由党系の E.Q.A. と労働者組織の L.R.L. は緊密な連繋プレーをとる事になり、5月2日には Cannon St. Hotel で首都労働者代表者会議、7日には E.Q.A. 主催の抗議集会在 St. James's Hall でもたれ、ついで11日にはいよいよモリス自身の呼びかけ第二弾として“*A Lover of Justice*”という名前のもとに、“*To the Working Men of England*”と題する Manifesto²⁰ が出されたのである。

ここでのモリスはもはや前回の投書のような“*The Author of Earthly Paradise*”ではなくて“*A Lover of Justice*”であり、その呼びかけの対象も自由党系新聞の読者ではなくて、イギリスの全労働者であり、平和への確信にみちたその内容は、ここ十数ヶ月の短かい、だが激しい彼のはじめてのコミットメントの成果を遺憾なく示すに足るものであった。そもそもモリスの生涯は、いづれの分野においても、すべて実践への直線的なかかわり合いの中ではげしくゆれ動きながらたえまなく成長して行った事を示しており、それはその師、T. Carlyle や、J. Ruskin の行動の軌跡とはまことに好個の対象をなしている。今回の E.Q.A. 体験でもその事は集中的に示されているわけである。同時にまたこの声明は、いわば政治の玄人である議会内自由党に属する人々のともすれば党利党略にはしる傾向にあきたりないモリスが、この場合素人である労働者に寄せる誠実な期待から筆を執ったものであり、後年の彼のユニークな「労働観」の発想契機の一つともなっているのである。

さて、近東ではロシア軍はトルコのオスマン・パシャの守る防禦線が突破出来ず、戦線は膠着状態におちいていたが、その間、ヴィクトリア女王とディズレリ首相の緊密なコンビが次第に効果を上げて、イギリス国民の伝統

的な反露感情が次第に高まりを見せ、新聞論調も著しく右傾化して来たのである。アンドレ・モロアが紹介する²¹ ロンドンのとある劇場での諷刺劇が示すように、グラッドストンの平和外交の主張も弱腰の軟弱外交ととられるようになり、また、労働者階級の高額所得層は労使の癒着による待遇改善とそれを可能ならしめる対外発展への期待という幻想があるためにつぎつぎに戦列から離れて行ったのである。反露ムードは当然力学的な反作用として親土感情を生む。元来、トルコのオットーマン銀行はトルコ公債に対して終始12パーセントの高額利子配当を行なって来たのであるが76年3月、国家財政の窮乏を理由として突如以後の配当を停止してしまった²²。かくて暴落した債券を抱える一般の利子生活者の淡い期待と、それを買い叩いて大量に抱え込んだ証券業者の思惑があと押しする結果、Turkophil なムードは日に日に高まりを見せ Slavophil な風潮を圧倒してしまったのである。加えて、軍需産業、兵器廠関係労働者の間には好戦・好景気ムードがあり、彼等の一部は日当を貰って政府激励大会に集まったり、反戦抗議集会へ乱入、妨害したりし始め、平和ムードは急速に冷え込んで行った。 (“... the war fever is raging in England, & people go about in a Rule Britannia style ...”)²³

かくて平和反戦の集会は右翼の妨害のために従来のようには容易に開催出来なくなり、 (“... it took some very heavy work to keep the enemy's roughs out; and the noise of them outside was like the sea roaring against a lighthouse ...”)²⁴, (“... I believe some blood was shed—from noses: the enemy spent huge time & trouble & plenty of money ...”)²⁵, (“... they had 400 roughs down in waggons from Woolwich Dockyard ... and people on our side had to hide away ...”)²⁶, (“... they were having a pretty little quarrel with the intruders at the other end ...”)²⁷ 又盛り上りもない事から2月の Hyde Park での大デモ計画は天候と主戦派の襲撃をおもんばかって中止となり、これを境として反戦運動は次第にしばんでゆき、露土戦争の終結を示すサン・ステファノ条約でもっ

て実質的にはウィリアム・モリスのはじめての組織参加は一まずおわりを告げる事になるのであった。 (“... there was a stormy meeting of the E. Q.A. yesterday full of wretched little personalities, but I held my tongue—I am out of it now, I mean as to bothering my head about it: I shall give up reading the papers: and shall stick to my work ...”)²⁸, (“... I have been so long now without doing any work, I mean my proper work ...”)²⁹, (“... E.Q.A. as good as dead.”)³⁰, (“... As to my political career, I think it is an end for the present: & has ended sufficiently disgustingly, after beating about the bush & trying to organize some rags of resistance to the war party ...”)³¹

さて1876年10月の投書から1878年2月に到るこの間のモリスの政治参加にはよく見るといくつかのモリス的な特徴が見られる。まず最初の投稿はそれまでの彼の社会的関心から見ていかにも唐突の観を与えるが、よくよく観察すれば決して「青天の霹靂」 (“peal of thunder... out of a clear sky.”)³²ではなく、十分に熟成期間があった事がうかがえる。Oxford時代に親友 Burne-Jones が紹介した同郷の Birmingham group の人々が伝えた Christian Socialism, K. マルクスがヨーロッパ革命と呼んだほど十九世紀中ばに欧州各地で頻発したさまざまな革命からのロンドンへの忘命者たちとの接触、女権拡張論者 Madame Bodichon をはじめとする画家 Madox Brown や W. B. Scott など芸術家グループの多かれ少なかれ radical な民主思想などが雌伏の時代のモリスの思想を育んで行ったものであろう。よく指摘される1871年の Paris Commune についての時を同じくする言及が彼のすべての書簡、日記の中に見当らぬこと³³、及び E. P. Thompson もふれていないが1866年、Jamaica 総督 John Edward Eyre が島の反乱鎮圧のため一千の家屋を焼き、数十人を死刑にしたため総督の職を免ぜられて本国へ召喚され、殺人罪として訴追されようとしたいわゆるエア事件についても感想をも洩らしていないことなど、彼がすべての反体制の動きに全く関

心がなかったらしい事を強調する伝記作者もある。けれども、これは充分に理解出来ない事件についてしばらく感想をさし控えただけの事であって、暴政に対する労働者の自然発生的な決起や、異人種支配を覆えそうとする原住民の絶望的なたたかひの意味がモリス自身の内部で熟成するのにしばらくの時を要したというだけの事であろう。前者についてはとりわけ 1885 年に到って *Commonweal* 誌上に連載の *The Pilgrims of Hope* となって見事に実をむすんだのである。

また最初の *Bulgarian atrocities* に対する彼のナイーブな反応は、Lord Byron の *Philhellenism* 以来のイギリス・ロマンティストの正統につらなる動きであり、或意味で当然の事としてうなづける行動であろう。時間的空間的に遠く隔ったものに対する憧憬、international な抽象性の強い観念よりは具体性のある national なものに対する関心、さまざまな形をとる革命と民衆への情熱といった十九世紀イギリス・ロマンティシズムのいくつかの属性が、フランス革命とナポレオン戦争に誘発されたバルカン半島における少数民族に対する独立支援の形となってあらわれたものと見る事が出来る。ただ「東方問題」に対するモリスのコミットメントが特殊モリス的形態をとって、普通の“*literati*”のそれとは違っていたとすれば、それは挫折ののちなおも断乎として敗北を拒否した点であろう。ワーズワースはフランス革命の精神に心酔しながら、*The Prelude, or the Growth of a Poet's Mind* (1850) に見るごとく、革命のプロセスに幻滅して転向した。S. T. コールリッジも又 1798 年のフランスのスイス侵略をもって革命から離れた。*France* の第一節から第三節までの革命謳歌が第四節に到って深い失望に変るところに彼の落胆ぶりがよく示されている。モリスの師ラスキンも又、パリ・コミューンに深い共感を示しながら、彼等のルーブル美術館焼打ちを暴挙と見なして革命精神を捨て去るに到った。ひとりモリスのみが挫折と失意に苦しみつつも頑強に敗北を拒否して再挙をはかる事になるのであった。

この場合モリスの史観に超時代的な予言者能力を期待するのはまさに望蜀

のねがいと云わざるを得ない。複雑な国際情勢が流動的な国内政局とみら合ってまれに見る程錯綜していた十九世紀イギリス史の上でも特別に評価の下しにくいこの「東方問題」のとり組みに対して一体誰が最初から明確な見通しを持ち得たであろうか。成程マルクスは当初から親土反露の方針を示し、ロシアの社会的変革を促進する事を期待してツァーの敗北をねがった。リープクネヒトへの手紙⁸⁴には縷々その事がのべられている。それは彼のいうヨーロッパ革命の進展を阻害する最大の要因としてロシア帝政をとらえ、この「反動の砦」の粉碎がなければ農奴の解放をはじめとするロシアの改革が、ひいてはヨーロッパの解放はあり得ないという彼の分析から出るものである。だが、かりにモリスがもう10年はやく Marxist になっていたところで果してこの時 Marx と同じ立場をとり得たかどうかは甚だ疑問である。何故なら Hyndman をも含めてこの Marx の態度は1877年のロンドンにあっては、分ちがたく Disraeli と同じサイドに立つ事になったであろうからである。では、さらに一步すすんで反露反土、反ディスレリ、反グラッドストンの立場をいち早くモリスがとっていたならばどうであろうか。おそらく誰も相手にせず、彼の Manifesto は何の反響おも呼ばなかったであろう。かりにこの時点でモリスがマルクスに学ぶ点があったとすれば、それは唯一つ、自由党と労働貴族が癒着し、従って墮落しているという指摘のみであった筈である。「東方問題」論議の末期において彼は自由党に対する失望と不満をかくしていない (“... I am full of shame and anger at the cowardice of the so-called Liberal Party.”)⁸⁵、 (“our parliamentarians began to quake.”)⁸⁶ が、ブルジョア化した上部労働者階級を切捨てた上で、つまり、ディスレリとグラッドストンの労働者階層獲得競争の行方を見極めた上で、真の彼の労働者との連帯が、彼の意識の混乱と疲労の中から再生して行ったわけである。

しかも彼の E.Q.A. 活動が今一つの投書、1877年3月、文芸雑誌 *Athenaeum* に送った、古建築保存のための具体的提案と終始平行して行なわれ

た点に意義深いものがある。the Society for Protecting Ancient Building, 略して anti-Scrape はかくして誕生したのであるが、この、E. Q. A. と S. P. A. B. 双方の活動は、詩人、工芸家、美術評論家、社会主義者のモリスが渾然一体となった全人格的行為の同根の二側面であり、そこから彼の生涯を貫いてかがやく、ユニークな「労働観」が生まれて来たのである。

思うにモリスのコミットメントは半世紀をへだてて彼に追従する Geoge Orwell のそれと著しいコントラストをなしている。直線的な参加と離脱のあり方、直感的な反応、行動の誠実さと強い信念において両者は共通であり、転向の負い目と暗い怨念からは前者が全く無縁であった点において異なっていたわけである。

注

- 1 Karl Kautsky, *Thomas More und seine Utopie*, 1926 (渡辺義晴訳, りぶらりあり選書, 法政大学出版局, 昭44) 第三篇, 第一章, その1。
- 2 William Morris, *News from Nowhere* 1891.
- 3 *The Letters of William Morris to his Family and Friends*, ed. Philip Henderson (London, 1950, Longmans, Green & Co.), p. 61 & f.
- 4 J. W. Mackail, *The Life of William Morris*. Vol. I (London, 1912, Longmans, Green & Co.) Chap. XI, p. 348.
- 5 J. Bruce Glasier *William Morris and the Early Days of the Socialist Movement* (London, 1991, Longmans, Green & Co.) Chap. V, "His Comradeship: Traits and Incidents", p. 35.
- 6 P. Henderson, *Letters*, p. 82.
- 7 *Letters*. p. 103.
- 8 *Letters*. p. 82.
- 9 A. J. Toynbee, *Civilization on Trial* (London, Oxford Univ. Press, 1948), Chap. IX. "Russia's Byzantine Heritage."
- 10 *Letters*, pp. 80-83.
- 11 E. P. Thompson, *William Morris, Romantic to Revolutionary* (N. Y. 1961, Monthly Review Press), Chap. VI "Action", II, "The Eastern Question."
- 12 G. M. Trevelyan, *English Social History* (London, 1942, Longman, Green & Co.) Chap. XVI. "Cobbett's England, II."

- 13 G. M. Trevelyan, *History of England* (London, 1926, Longman, Green & Co.) Book VI, Chap IV "Eastern Question," p. 684.
- 14 *Letters*, p. 99. Philip Henderson はこの書簡を1877年11月15日付のものとしている。E. P. Thompson も指摘するごとく、それは Mackail よりの引用 (Mackail, Vol. 1. 1877年, 44才の項, p. 358) によるものであるが、内容的にみてもあきらかに1876年11月15日の誤りである。
- 15 *Oxford History of England, England 1870-1914* by R. K. Ensor (Oxford, 1936, Univ. Press), p. 45.
- 16 Thomson, *op. cit.*, p. 244.
- 17 *Oxford History of England, op. cit.*, Chap. II. "The Rule of Disraeli", ["The Eastern Question."]
- 18 Thompson, *op. cit.*, p. 246.
- 19 *Ibid.*, p. 256 & f.
- 20 Henderson *op. cit.*, Appendix II "Unjust War" p. 388 & f.
- 21 André Maurois, *A History of England*, Eng. edition (N. Y. 1960, Grove Press), Book Seven, Chap. VI "Disraeli and Gladstone" Sec. 4. p. 456
- 22 河合秀和, 「現代イギリス政治史研究」, (東京, 昭和49, 岩波書店), 第一章「イギリス国家構造と帝国主義」, 第四節, p. 77.
- 23 *Letters*, p. 111, 11. Feb. 1878.
- 24 *Letters*, p. 107, 19. Jan. 1878.
- 25 *Letters*, p. 106, 4. Jan. 1878.
- 26 *Letters*, p. 108, 1. Feb. 1878.
- 27 *Letters*, p. 110, 11. Feb. 1878.
- 28 *Letters*, p. 112, 25. Feb. 1878.
- 29 *Letters*, p. 112, 6. Mar. 1878.
- 30 *Letters*, p. 119, 2. Apr. 1878.
- 31 *Letters*, p. 111, 25. Feb, 1878.
- 32 E. P. Thompson, *op cit.*, p. 246.
- 33 *Ibid.*, p. 250.
- 34 K.. マルクス, 「東方問題と汎スラヴ主義にかんする手紙から」. 1, "東方問題についてマルクスからリープネヒトへ, 1878年2月4日・10日" (マルクス・エンゲルス選集, 第七巻, 下, 1950年, 大月書店) pp. 391 & ff.
- 35 *Letters*, p. 109. 4. Feb. 1878.
- 36 *Letters*, p. 111. 25. Feb. 1878.

Synopsis

William Morris and the Eastern Question

Bin Miyai

At the time when the Eastern Question occurred in Near East in 1876, William Morris was 42 years old, just in the middle of his social activities which began at the age of 22 when he joined the architect's office of G. E. Street, and ended at the age of 62 at Kelmscott House. With the Eastern Question he entered into the second part of his life, busy with political activities as a socialist. The Eastern Question itself was one of the most complicated in 19th Century England. Morris himself, as a Liberal at first, was against Disraeli, the prime minister, who was head of the Tories, and was in favor of the Turkish Government, and against the Russian Tsar. Together with Gladstone, the "big gun" of the Liberal party, Morris was anti-Turkish, and consequently a Slavophil. Through this short but severe period of training in politics, he next proceeded to get in touch with the organization of labourers, and founded the Eastern Question Association with them, and became its Treasurer. The question itself ended with the Berlin Conference of European Powers, and a peace-treaty was concluded between Russia and Turkey. This precious experience of his first political committment taught Morris, in spite of the defeat and frustration, many lessons, and he made up his mind not to be a Liberal any more, and tried to be sympathetic toward labourers. From this, his unique view of "labour" came to take shape.